
和歌の同化翻訳論

——本居宣長の俗語訳理論から——

玉田 沙織

〈名古屋大学〉

はじめに

和歌翻訳を巡る議論は、西洋の翻訳理論の歩みとともに、主に西洋の視点からなされてきた。しかしその一方で、同じ「訳」としては、日本にも現代語訳の伝統が存する。現代語訳には言語の壁こそ無いものの、原典がそのままでは解し得ないために生まれた工夫であり、等しく言葉の問題を抱える。また、テキスト布置の観点から言えば、原典受容の産物すなわちメタテキストであるという点でも等しい。むろん両者は隔たりも大きいのが、それゆえに、共通項の考察は、文化的コンテクストを隔てた他者とのコミュニケーション論、メタテキスト生成論をも射程に収める。

如上の視点から、本稿では、日本において初めて体系的な和歌現代語訳を導入した本居宣長の理論に注目する。諸氏の翻訳上の工夫を考察したのちに宣長の弟子たちによる実践例を分析することで参照の有効性を示し、和歌の異言語間翻訳の望ましい形を考える。最終的にはその実践として、論者の研究対象とする『後撰和歌集』歌の英訳例を示すこととする。

1. 翻訳と和歌翻訳論の現在

翻訳の理想形についての発言は、紀元前の Marcus Cicero にまで遡る。彼は“De optimo genere oratorum” (BC 46) において、自身の翻訳が「雄弁家」に倣ったものと述べ、逐語訳を行う一般的な「訳者」との差を強調する¹。「雄弁家」とは聴衆の感動を第一に目指すものであり、翻訳で言えば、より自由な訳ということになる。翻訳という営みは一般的に、原文（起点テキスト source text）の解釈と訳文（目標テキスト target text）の生成という二段階のコミュニケーションとして把握される。Cicero が問題としているのは、解釈を成した上での訳文作りにおける原文との距離の取り方、すなわち生成である。これを受けて、以後は直訳 literal translation と自由訳 free translation を両極とした議論が行われた²。

次に特記すべきは、近代以降の翻訳理論に絶大な影響を与えたとされる、Friedrich Schleiermacher の講義である。「翻訳のさまざまな方法について」（1813、ベルリン王立科学アカデミー）と題された講義の中で彼は、上記の翻訳の硬さの問題を次のような形で引き継ぐ。

さて、本来の翻訳者は、まったくかけ離れた人格である著者と自分の読者というふたりの人間を実際に出会わせ、ことに後者を母国語の圏内から無理に引き出さずにしかもできる限り完全に前者を理解、

1 H. M. Hubbell, trans. *De inventione ; De optimo genere oratorum ; Topica* (Cambridge: Harvard University Press, 1968).

2 以下、翻訳用語や理論の影響関係認定の多くは、ジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』（鳥飼玖美子監訳、2009年、みすず書房。Munday 原著は第二版、2008年刊）に拠る。

享受させようとする。そのために翻訳者が辿る道はどういったものでしょうか。私が見たところでは道は二つしかありません。著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす、あるいは読者の方をできるだけそっとしておいて著者を読者に向けて動かす、このどちらかしかありません。二つの道はまったく異なるのですから、どちらか一方を徹底して厳密に追求する他なく、折衷してみたところで精々信頼に値しない代物しか生み出せないことはわかりきっています。著者と読者とが完全にすれ違ってしまわないようにすること、これが肝心なのです³。

Schleiermacher が支持する前者は、「翻訳者がもとの言語に関する知識によってあるがままの作品から得てきたのと同じ印象を、読者に伝えようとする」とも説明されるように⁴、異質さを残したままの翻訳であり、翻訳者が行う操作は「異化作用 alienating」と呼ばれる（後者は「同化作用 naturalizing」）。この主張は、1980年代中頃の Antoine Berman や、1990年代から積極的な発言を行っている Lawrence Venuti によって引き継がれ、翻訳の異化 foreignizing（対義語は同化 domesticating）を推奨する現在の流れの源となったようである。

このようにして目標テキスト作成時の姿勢が問題となるのは、翻訳が言語の変換と同時に、文化やコミュニケーション状況の変換までを伴うためである。著者と訳者との時間的、空間的隔たりが大きくなりがちな現在では、問題は Cicero の頃よりもはるかに複雑である。「翻訳不可能性」が取り沙汰されるように⁵、語彙から文構成、文化に至る多様な要素を翻訳するのは至難の業であり、同化と異化の基準を定め、優先順位を以て選択を行う必要が生じる。そしてその難度は、商業翻訳よりも文芸翻訳において、さらには、散文よりも、形式が芸術性を持つ韻文において、高くなる。

文芸翻訳において訳者が考慮すべき点は多々あるが、その出発点たり得るのは、Joshua Mostow 氏が参照した⁶、Susan Bassnett-McGuire 氏の指摘であろう。

What is generally understood as translation involves the rendering of a source language (SL) text into the target language (TL) so as to ensure that (1) the surface meaning of the two will be approximately similar and (2) the structures of the SL will be preserved as closely as possible but not so closely that the TL structures will be seriously distorted⁷.

Bassnett-McGuire 氏によれば、起点言語（SL）から目標言語（TL）への翻訳時に目指されるべきは、(1)両者の表面的な意味がおおよそ似ることと、(2) SL の構造が、TL の構造をひどく歪めることが無い程度に、可能な限り保存されることである。すなわちここでは、翻訳時には、意味だけでなく、構造の置き換えを目指すことが述べられている。韻文という、形式上の構造が重要要素であるジャンルにおいては、この第二点が特に重要となる。

それでは、このような翻訳について、韻文に属する上に古典でもある和歌のジャンルでは、どのような工夫がなされているのか。和歌における構造とは、ひとまず、形式面では五七五七七の五句と三十一音節を指し、言語面ではいわゆる文法構造の他に、句切れ、序詞、枕詞、掛詞、縁語といった、言葉の切れ続きに関わるものまでを含むと考えられよう。和歌翻訳においては、同化と異化の度合いを決め、起点言語における詩の完成度をいかに保ちつつ、移し換えを行うかが肝要になる。以下では Mostow 氏に倣い、同氏の著書に分析が見えない例を中心に、諸氏の小野小町「はなの色はうつりにけりないたづらに我が身よにふるながめ

3 三ツ木道夫『思想としての翻訳 ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』2008年、白水社、38頁。

4 注3に同じ。

5 J. C. Catford, *A Linguistic Theory of Translation: An Essay in Applied Linguistics* (London: Oxford University Press, 1965), Chapter 14.

6 Joshua S. Mostow, *Pictures of the Heart: The Hyakunin Isshu in Word and Image* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1996).

7 Susan Bassnett-McGuire, *Translation Studies* (London and New York: Routledge, 2008), p. 11.

せしまに」詠の訳を分析する。原歌解釈の問題には立ち入らず、すべての訳が直面する形式面での工夫に、特に注目したい。

『百人一首』英訳史の始まりは、明治維新以前にまで遡る⁸。そしてその当初から採用されているのが、押韻という同化の技法である。1863年に初めて来日し、横浜の英国公使館で医官を務めた Frederick Victor Dickins (1835–1915)は⁹、1865、1866、1909年に、都合三種の英訳を出版している。現存最古の『百人一首』英訳例である1865年版では、下記のように一行目と三行目、二行目と四行目がそれぞれ韻を踏んでいる。

The flower's tints soon fade away,
Ah me! as years flit on—
All men shall say: —
How hath her beauty gone!
Lit. —‘The colour of the flower hath faded, alas for me! that I wither away as I grow older, is a thing patent to the eyes of men¹⁰.’

同化を目した押韻は、翌年の訳でも二行目と四行目に見られる。Keene氏が「ディキンズ(や当時の人々)は、韻を踏む必要性を強く意識していたのであろう」と述べるように¹¹、押韻は、馴染みの無い異国文学の韻文らしさを表すために採用されたのであろう。同化と異化の度合いは相対的なものだが、これらの訳は、起点テキストたる和歌に備わらない押韻の形式を採用したという点で、同化翻訳と呼ぶものである。

しかし、複数の翻訳者の試みの後に出された同氏の最終版では押韻は消え、異化が強く意識されている。訳は五句を意識して五行となり、句の長短を視覚的に示すために行頭が動かされ、また、音節数が意識されている。

O cherry-blossoms,
in the long rains wilting, withering
so, long long years
agone, I now bewail me,
have ta'en from me my beauty!

上記の詩では、意味の保存と同時に、音節数と行数の保存という、原構造を守るための努力が重ねてなされている。第一に、二行目では花が雨に萎れる様を *wilting* と一度表現するだけでなく、*withering* と重ねて述べることで強調し、かつ視覚的に音節の長さを示したようである。音節数が五九四七七音節となっている当該歌において、二行目は *withering* が無ければ六音節となり、本来の七音節に近くなるが、ここでは強調を優先させたのであろう。そして、五行目では、自らの美貌が奪われたことを、二音節を要する *taken* ではなく *ta'en* と縮約形を以て表す方略を用いて、音節を減らしているようである。五行に分節することを試みつつも不自然な改行となっているが、このように Dickins 氏が和歌の構造に対して示した敬意はそのまま、大きな構造上の制約の下で、日本語力、英語力と同時に芸術的感性を發揮して訳を行った同氏自身に払われるべき敬意であろう。この異化に傾斜した試みは Helen Craig McCullough 氏などによって継承され、より平明な訳へと結実している。

8 以下、調査は四種の資料に基づく。Mostow 氏注 6 掲出書、吉海直人編『百人一首研究資料集』5 (2004年、クレス出版)、PMJS, *premodern Japanese texts and translations* (<http://www.meijigakuin.ac.jp/~pmjs/trans/index.html>)、Webcat Plus。

9 吉海直人「第五巻 英訳百人一首解説」注 8 掲出書、1 頁、Donald Keene, “Foreword,” Peter McMillan, *One Hundred Poets, One Poem Each* (New York: Columbia University Press, 2008), p. xi. Dickins 氏の訳の引用は吉海氏注 8 掲出書に拠る。

10 *Lit.* は *literal version* の略で逐語訳の意。韻律と詩行の規制を外すことで、起点テキストの意味を保存しようとしたもので、他の歌々にも付されている。Dickins 氏に限らず、詩の後に解説を加えて詩を補う訳は多い。

11 マックミラン・ピーター『英詩訳・百人一首 香り立つやまところ』佐々田雅子訳、2009年、集英社、6 頁。

Dickins 氏以降も多くの『百人一首』訳がなされたが、起点テキスト構造への配慮の度合いは様々である。構造にもっとも留意して強い異化傾向を示すのはやはり、Bassnett-McGuire 氏の理論を評価し、厳密な態度を守った Mostow 氏の訳である。

hana no iro ha	The color of the flowers
utsurinikeri na	has faded indeed
itadzura ni	in vain
wa ga mi yo ni furu	have I passed through the world
nagame seshi mani	while gazing at the falling rains.

Mostow 氏の訳は、Dickins 氏らの五七五七七音節こそ踏襲しないものの、原典のローマ字化とともに、五行表記と行頭配置の工夫という形式の移し換えを試みている¹²。

そして、何よりも特記すべきは、言語面の移し換えであろう。日本語と英語の文法構造が大きく異なるにもかかわらず、語順は守られている。また、氏は、第三句「いたづらに」が上下の句に係るとの解釈に立つて翻訳を行い、三行目が前行から faded ... in vain と続き、次行へ in vain have I ... と繋がるような二重性を持たせている。おそらくは句切れも無いとの見解に立つのであろう、当該歌は他の歌とは異なり、コンマやコロンのような、流れを断ちきる記号は避けられ、異化翻訳の姿勢が貫かれている。

このように形式面を主として異化が好まれる傾向は、ひとつには、彼等が翻訳者であると同時に研究者であったことによる。彼らの多くは、自国においては、在来の価値観に対する異質性の提示を以て、研究の有益性を証明することが求められるからである¹³。また、前述のとおり、翻訳学において異化が推奨されることも影響していよう。翻訳は得てして自民族中心主義に曝され、目標テキストへの異質性の介入を避けるとの指摘があり¹⁴、起点テキストに対する配慮が叫ばれている。

しかしごく近年、逆の方向を目指す訳が生まれ、Donald Keene 氏や日本翻訳家協会から高い評価を受けた。「広い読者層に訴え」ることを目指した Peter McMillan 氏の次のような訳である¹⁵。

A life in vain.
My looks, talents faded
like these cherry blossoms
paling in the endless rains
that I gaze out upon, alone.

12 三十一音節の移し換えに関しては、音節そのものではなく、行頭位置のずらしという視覚的效果を通して、句の長短のリズムによって間接的に表現されていると解すべきか。また、第二、五句は句末が *vain, rains* となっており、*rain* が複数形ではあるものの、押韻が意識されている可能性がある。

13 エスペランザ・ラミレス・クリステンセン「日本文学研究修正論—その潜在性および陥穽」、諸氏「補足・質疑・応答」『国際化の中の日本文学研究』（2004年、風間書房）。また、エドワード・ケイメンズ「翻訳の危機 翻訳の価値」『日本文学翻訳の可能性』（2004年、風間書房）。後者は「大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」日本文学国際研究集会」の報告集。

14 Antoine Berman, "Translation and the Trials of the Foreign," *The Translation Studies Reader* (London and New York: Routledge, 2000). 翻訳に働きかける権力については、Lawrence Venuti の一連の研究がある。なお、押韻という同化作用を加える和歌中国語訳についても、呉衛峰氏が懸念を示している。古代人にとっての漢詩が和歌とともに「日本文学伝統の一翼」を担い、「相互補完的關係」にあったため、押韻を行うことは「和歌を漢詩に包摂してしまい、和歌の特質をないがしろにする結果になりかねない」と起点テキスト時のバランスを誤解させる危険性を指摘する（「和歌の翻訳と異文化体験の問題—銭稻孫の『漢訳萬葉集選』を中心に」『東北公益文科大学総合研究論集』12、2007年6月、71頁）。

15 Peter McMillan, *One Hundred Poets, One Poem Each* (New York: Columbia University Press, 2008). 日本語訳に、注11 掲出書があり、引用はその「日本語版のための序論」に拠る（33頁）。原著は2008年度に第44回日本翻訳出版文化賞特別賞を受賞したが、書評類も Keene 氏の「もっともよいのは、原作の生き生きとした感情と叙情性を英語で伝えることに成功している点であるというご意見に賛意を示してくれた」という（22頁）。

ここでは五行の形式を取るが、他の歌は必ずしもそうではない。また、押韻や五七五七七の音節法則も無く、形式上の異化の度合いは低いと言える。これらへの努力は語彙選択に制限を加えて難解な訳を生むことがあるが、McMillan 氏の方法では、その危険性は回避される。意は明快であり、形式面で同化を志向することで、意味の伝達を保証した方法である。

もっとも、McMillan 氏の方向性は、技巧に富み、意味の重層性を持つ小町詠においてはあまりその威力を発揮していない。同氏自身も別途二種の訳を示した上で、「これを一つの短い英詩として翻訳するのは不可能である」と述べている¹⁶。McMillan 氏がその成果を自負する一首は、次の柿本人麻呂「あし曳の山どりのをのしだりをのながながしよをひとりかもねん」詠である。

The
long
tail
of
the
copper
pheasant
trails—
drags
on
and
on
like
this
long
night
in
the
lonely
mountains
where
like
that
bird
I
too
must
sleep
without
my
love.

注目すべきは、そのレイアウトであろう。ここでは山鳥の尾という「ながながし」い印象を与える序詞が、豊かに波打つ尾を連想させる縦長の形で視覚的に表現され、それを寸断する記号は見られない。また、序詞から「ながながし夜」までの、音韻上の反復構造も、**long**, **on**, **lonely** といった同音を用いて移し換えられている。形式上の異化を避けた McMillan 氏は、その一方で序詞という言語上の置き換えにおいて、積極的な

¹⁶ 注11掲出書「日本語版のための序論」44頁。

異化を行ったようである。しかし同化方略も手放したわけではなく、主語は明示される。McMillan氏は「現代英詩、とくにロマン派以降のものでは、主語を示す言葉がないなどというのは思いもよらない」と主張し¹⁷、当該歌のように原歌に主語の無い歌にも主語を付している。

McMillan氏の方法は、形式上の構造の保存は避けて同化を志向し、言語面でも主語の扱いにおいて同化方略を取っており同化翻訳と言えようが、言語面においては、視覚的な効果を用いることで構造を保存する。起点テキストへの配慮も残した同化翻訳である。

同化傾向の強さに関わらず、視覚的効果を狙った和歌翻訳は他にもある。たとえば、Steven Carter氏が、和歌披講時の「原作のシンタクス」を反映させるために採用した稲妻状レイアウトや、Edwin Cranston氏が掛詞や同語反復といった音韻特徴の強調を狙って採用したイタリック字体などである¹⁸。このような視覚の活用は、目標テキストの意味伝達を阻害せずに起点テキスト構造を保存する方法として、有効であろう。

同化翻訳、異化翻訳はそれぞれに有益である。その選択の妥当性は、遠藤周作作品の翻訳を行ったWilliams氏がBermanの「否定分析論」¹⁹を参照しつつ結論するように、「翻訳者は原文の様々な特質の重要度を比較考察しなければならない。そして、その決定は、目標言語の読者にとって何が重要であるかということについての直感と信念に基づいて行なわれることになる」のであり²⁰、また機能主義翻訳論者のHans J. Vermeerが「スコポス理論」においてその選択プロセスを体系化したように²¹、対象読者や翻訳目的に従って柔軟に選ばれるのが望ましいのであろう。

それでは、理想的な同化翻訳とはどのような形か。Schleiermacherと同時代、はるか東方で初学者を対象になされた訳と、そこにおいて有効性が認められ、その拠り所とされた理論と工夫とを見ることで考察を行いたい。

2. 『後撰和歌集新抄』における俗語訳の踏襲

F. Schleiermacherの講義の翌年、文化11年(1814)に『後撰和歌集新抄』の最初の一卷、別記が刊行された²²。『新抄』の著者は中山美石(1775-1843)、三河吉田藩の国学者で藩校時習館の講釈方、その師は本居大平である²³。初学者を対象読者とした該書は、書名の語るとおり『後撰和歌集』の注釈書、すなわちメタテキストである。

『後撰集』は平安時代前期に、二番目の勅撰和歌集として編まれた。所収歌は『古今集』の流れを汲んで掛詞、縁語といった技巧に富み、また、「直接対者に語りかける性質、いわば会話的性格を持っている」と言われる²⁴。奏覧時期は不明だが、村上天皇の天暦5年(951)10月末には作業が開始されていた(『本朝文粹』源順「奉行文」)。以後、平安時代から歴とした勅撰集としての扱いを受け(『栄花物語』等)、『古今集』『拾

17 注11掲出書「日本語版のための序論」36頁。

18 Steven D. Carter「題詠の翻訳 頓阿の歌をめぐって」『国際日本文学研究会会議録』23、2000年3月、22頁。Edwin A. Cranston, *A Waka Anthology VOLUME ONE, VOLUME TWO* (Stanford: Stanford University Press, 1993 and 2006).

19 注14掲出書。

20 マーク・ウィリアムズ「誠実さ、それとも正確さ? 遠藤周作文学を訳してみよう」『日本文学 翻訳の可能性』2004年、風間書房、113-4頁。Berman氏の分析対象は小説だが、和歌においても対象読者への配慮が必要な点は同じである。

21 Katharina Reiss/Hans J. Vermeer, *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie* (Tubingen: Niemeyer, 1984)、藤濤文子『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相』2007年、松籟社、27-9頁に紹介。

22 『享保以後大阪出版書籍目録』の出版許可日と刊記より。『新抄』の刊行は巻16まで数次に分けて行われた(藤井隆「中山美石年譜考証」『文莫』12、1987年5月)。続巻は写本で残されたが、巻17、18は途中で行方不明となり、第二次世界大戦の折に焼失した(拙稿「翻刻『後撰和歌集』中山美石書入(一)巻第一七一『後撰和歌集新抄』復元のために」『古代文学研究』16、2007年10月)。巻19、20は、巻1-16とともに近代に入ってから活字化された。

23 三河吉田藩は現在の愛知県豊橋市を中心に領した。講釈方は教授。本居大平は宣長の養嗣子。

24 片桐洋一「『後撰集』の表現」『古今和歌集以後』2000年、笠間書院、191頁(初出1964年11月)。

遺集』等とともに、藤原俊成によって「深く心得べきなり」（『古来風体抄』上）、定家によって「心に染むべし」（『詠歌大概』）との評価を得るが、これ以前には全歌を対象とした注釈書は少ない。

しかし、注釈書である北村季吟『八代集抄』（1682刊行開始）のほか、契沖（1640-1701）の書入略注、本居宣長『後撰集詞のつかね緒』（1802刊、詞書を扱う）を参照し²⁵、他の本居門学徒の助けと師の大平の添削を経て成った当該書は、現代の『後撰集』研究者によっても「注釈中の白眉である。今なお、総体としては『新抄』を越え得ていない。巻十七・十八の注が無いのと、巻十九・二十の注が簡略であるのが残念である」と評価されている²⁶。その理由のひとつは、先人たちが注釈をほぼ個別歌の次元に留めるのに対し、美石が時代の表現特徴にも言及するためであろう。『新抄』は、現存テキスト群が証し立てる草稿と原歌との間の解釈の往還運動に加え²⁷、千四百余首の注釈間の交渉によって研究を発展させたと言える。そして当該テキストが翻訳と結びつくのも、この到達点においてである。

『新抄』が見出した『後撰集』の特質のひとつに「戯^{たわむれ}」がある。秋下巻の395番歌は、この性質を以て「此集の頃の真の面目を得たり」と評され、当時の代表歌として遇される。そのような重要歌の注釈において、眼目を伝えるために美石が選びとった方法は、「俗語」すなわち現代口語の訳であった。下記のとおり、395番歌は藤原雅正（961生存）によって詠まれ、前歌と贈答を成している。

隣に住み侍りける時、九月八日、伊勢が家の菊に綿を
着せに遣はしたりければ、又のあした、折りて返すとて 伊勢
かずしらず君がよはひをのぼへつつなだたるやどのつゆとならなん
返し 藤原雅正
露だにも名だたるやどの菊ならば花のあるじやいくよなるらん²⁸

このやりとりは、菊の露を含ませた綿で体を拭うことで長寿を願うという、重陽の風習に因んでいる。物の属性はその持ち主にも移るといふ古代的発想に立ち、菊の長命を人に移すための行事である。贈歌の詠者は時の歌壇の重鎮である伊勢（877?-938?）であり、答歌の詠者の雅正は、その一世代下に当たる²⁹。伊勢は、前日に預かった、朝露を含んだ綿を雅正に返すにあたって、菊の露が、彼を長寿にしながら、「なだたるやど」たる彼の婚家のものになって欲しいと詠んだ³⁰。一方の雅正は、儂く置く露でさえも評判になる家の菊ならば、ましてその花を常に身近に置いている主は何歳なのだろうかと詠んでいる。

美石は当初、雅正の返歌を十全には解しえなかった。版本の前テキストに当たる書入本では³¹、『抄』に倣って穏やかで賀性の高い歌と解しつつも「二首トモ意タシカニ聞トリ難キ故試ニカク釈シ侍」と疑問を示している。しかしこの疑問は、仲間の助けを得て氷解したようである。版本には次のように見える。

25 季吟『抄』以外の先行注釈書としては、萩原宗固（1703-1784）『後撰和歌集増抄』がある。また、岸本由豆流『後撰和歌集標注』は『新抄』とほぼ同時期の成立だが、前後関係は不明。

26 工藤重矩『新注八代集 後撰和歌集』1992年、和泉書院、解題16頁。

27 テキスト群は、版本の他に書入本（UCB蔵、美石・大平筆に豊頼補筆、対象巻1～20）、『後撰集解』（東大、書入本の大平書入自写、巻13）、版本「序」草稿（和歌山大、大平、序）、版本版下草稿（UCB、美石、巻9、10、13）、『呼子鳥考』（慶應大、永平と東大、豊頼、巻2の79番歌）等により成る。

28 引用は『新編 国歌大観』編集委員会編『新編 国歌大観 CD-ROM 版 Ver. 2』（2003年、角川書店）に拠る。本稿に引用の他の和歌も同じ。また、以下に引用する『新抄』書入本はUCB蔵『後撰和歌集』（5895.4/5281/v.1(2)）、版本は島内良二監修『後撰集新抄（復刻版）』（1988年、風間書房）に拠る。一部、表記を整えた。

29 『後撰集』が伊勢の家を「隣」とするのは、雅正が藤原朝忠妹を妻としたため。伊勢の隣家に朝忠が住まったこと、85番歌参照。藤原朝忠の父は右大臣定方であり、名家と言える。また、「住む」とは通い住むの意（注26掲出書、当該歌補注）。

30 片桐洋一『後撰和歌集』当該歌注に同じ（1990年、岩波書店）。

31 書入本の版本との距離は比較的近く、集の性質への言及こそ見られないが、季吟『抄』や契沖書入からの異伝や参考歌といった基礎資料が集められた上で解釈が示され、師・本居大平の添削が加えられている。当該歌には大平の添削がない。

○甕麻呂云。此返歌は。露だにも限なき齡といふ宿の菊ならば。其花の主は。幾世ばかりの齡なるらん。さぞ旧き事なるべし。と云意なり。これ此集の頃の贈答の戯の例なり。いくよなるらんとある。なるらんの詞に心をつくべしといへり。此説まことにおもしろし。此集の頃の真の面目を得たりといふべし。〈菊は。万葉に見えずして。……

(頭注細書) 下ノ句を俗言にいはず。花の主ハ。^{オホドシマ}大年増デアラウ。といふ意なり。

冒頭の甕麻呂とは、本居宣長と春庭に師事した近郷の学徒、夏目甕麻呂(1773-1822)を指す。ここで甕麻呂は「なるらんの詞に心をつくべし」と末句の助動詞への注意を促している。その理由は、冒頭部掲出の文語訳に現れている。「……齡なるらん。さぞ旧き事なるべし」と下線部部分に意味が補われてるように、「らん」が係助詞「や」の結びとなることで、「花の主」伊勢の齡が強調されているからである。

前述のとおり、雅正は伊勢より若く、子の世代に当たる。年配女性の年齢を問題にすることは当時も非礼に当たったが、『後撰集』は、両者の関係性においては問題が無かったものとする。疑問の係助詞「や」を用い、伊勢の年齢を疑う形で取りたてることで、「父兼輔と同様に古今集時代を飾った大歌人の伊勢に……尊敬の念をこめて戯れた」と解される箇所である³²。当該歌に対する美石の感銘のほどは、「まことにおもしろし」との評に加え、甕麻呂が「此集の頃の贈答の戯の例」と述べたものを「此集の頃の真の面目を得たり」とまで持ちあげるところに現れている。個別の和歌が「戯」に詠まれたとの指摘は書入本段階から見えるが、版本395番歌以前は、当該時期の特質として指摘されることは無い。「戯」が当該時期の特徴であるとの認知の瞬間が刻まれたのが、当該歌の注なのである。

しかし、ここでさらに注目したいのは、美石がこの代表歌の眼目を読者と共有するために、頭注に「俗言」を追加したことである。この「俗言」を、美石は『新抄』冒頭の「凡例」では次のように説明する。

○歌の解^{トキ}ぎまは。鈴ノ屋ノ大人の。古今集遠鏡に過たるはなし。古への雅言^{ミヤゴト}を。正しく今世^{イマノヨ}の詞^{コトバ}に訳^{ウツ}されれば。其歌よみ出たるをり。其人の心に思へりしくまぐままで。残りなく我心の底^{ソコ}に得^エらるゝ物は。遠鏡なり。

すなわち「俗言」とは、本居宣長が『古今集遠鏡』(1794成、97刊)で用いた俗語、つまりは当時の口語を指す。詳しくは次節にて扱うが、当代人が一首の意を隈なく理解することを目指すという姿勢は、同化訳と言えよう。続けて美石は言う。

故^{カレ}今も遠鏡の如くとかまほしけれど。そはいといと大事なるわざにて。⁽¹⁾いささかの訳^{ウツ}しぎまにて。いたく物ぞこなひとなる事も。又かの訳しぎまに過たるはなく。おぼろけのものゝ。かけても及ぶべきならねば。今は。県居ノ大人の。百人一首うひまなびなどのさまにものしつ。されど。⁽²⁾遠鏡の解^{トキ}ぎまの。げにと心に入て。心得やすく。つねにしかおもふより。又人々にもしかときさとしなれたる心は。おのづから。遠鏡ぎまのともすればうちまじりて。……⁽³⁾又詞の勢^{イキホ}ひなど。委^イくいはまほしき所々は。いよいよかの訳言^{ウツシゴト}のふりに物したり。そは⁽⁴⁾上に細書とせり。

美石は宣長の孫弟子に当たるが、それゆえに『遠鏡』訳を称賛するのではない。傍線部(2)の示すように、『遠鏡』の俗語訳の分かりやすさを自身が実感しており、日ごろから人々に俗語訳を以て教授を行っていたためという。

もっとも、美石は俗語訳の効力を盲信していたわけではない。(1)にあるとおり、わずかな訳によって、却っ

32 注30に同じ。

て価値を損なう危険性を承知していた。おそらくは、くだけた訳が原歌の威厳を損なうような場合を想定するのであろう³³。しかしそれでもなお(3)「詞の勢ひなど。委くいはまほしき所々」に限って(4)「上に細書」の形で選り取られたのが、部分俗語訳という方法であった。395番歌頭注「花の主ハ。大年増デアラウ」の生成の背後に見るべきは、俗語訳の危険性を知りつつもなおその有効性を信じ、代表歌の眼目の伝達を委ねたという、美石の選択である。

次節では、同化訳における効果的な形式を考えるために、美石のこの実践の拠り所となった『遠鏡』理論とその方法を考察したい。

3. 『古今集遠鏡』の俗語訳理論

『古今集遠鏡』は、『古今和歌集』のメタテキストであり、宣長が「俗言」と呼ぶところの当時の口語を用いて和歌を解釈する。その「はしがき」からは宣長が確とした現代口語訳理論を構築していたことが知られる。

『遠鏡』理論の形成に与ったのは、部分訳ではあるものの、近い訳調の俗語訳を行った富士谷成章『挿頭抄』(1767刊)だったようである³⁴。しかしここではまだ、理論化には至っていない。また、先行書で理論化を行ったものには、伴蒿蹊『国文世々の跡』(1777刊)と『訳文童論』(1794刊)の散文翻訳論があるが、一方でその訳は「気楽なくだけた文章でも、滑稽な文章でも、あるいは口語文でもない」と形容されるように、硬さ、異質さを残す³⁵。『遠鏡』は理論と実践を兼ね備えており、日本における俗語訳の先駆けと見てよいようである。

俗語訳と翻訳を繋ぐ先行研究は、すでに存在する。たとえば、田中康二氏は宣長の俗語訳を「翻訳」と呼び、その理論と技法を考察する³⁶。同氏はまず、書名に象徴的に用いられた「遠鏡」、すなわち望遠鏡の機能と「はしがき」を手掛かりに、鍵語となる「訳す(翻訳)」の意味を探る。そして「訳す」が「あたかも言霊を持つかのように意味の自己増殖を始める」として、宣長が見出した翻訳機能として「映す(投影)」「移す(移動)」「写す(転写)」を指摘する。同氏によれば、宣長にとって「翻訳とは第一に鏡のように実体を映すものであり、第二に時間的空間的な隔たりを瞬時に移すものであり、第三に寸分違わぬ精度でそっくりに写すものであった³⁷。また、Mostow氏も、時代ごとの「現代日本語」への「翻訳」を検討する中で宣長の弟子である石原正明の『百人一首新抄』(1804刊)を挙げ、一定の評価を与える。宣長以後に陸続と生み出される俗語訳の初期に為されたその和歌訳は、同氏によれば詩歌の形式を取っていないために翻訳とは呼べないものだが、「生きている歌人の声が聞こえるよう」だという³⁸。

本居宣長が種々の研究を通して最終的に目指したのは、『古事記』を頂点とした世界に存在する「大和心」の解明と言えるであろう。そしてその涵養のためには、学問を通じて古代人のものの見方を体得する必要があると考えていた。俗語訳が体系化されたのも、この要請による。「はしがき」の冒頭近くで宣長は、俗語訳の効力につき、次のように述べる。

33 翻訳時の類似例は、Bassnett-McGuire氏がCatullus(BC84?-BC54?)の『歌集』13歌Copley訳を以て論じ(注7掲出書Chapter 3)、Kamens氏も『今昔物語集』の訳を以て経験したという(注13掲出論文)。

34 竹岡正夫「挿頭抄」『国語学研究事典』1977年、明治書院、698頁。同氏によれば、成章の訳はさらに、実兄皆川淇園の漢語学に学んだものという。

35 風間誠夫「『訳文童論』とくうつしぶみ」の展開『近世和文の世界 蒿蹊・綾足・秋成』1998年、森話社、81頁(初出1992年1月)。同氏は中村幸彦「型の文章」『中村幸彦著述集』2、1982年、中央公論社(初出1967年9月)や清水勝「小沢芦庵の“ただこと歌”をめぐる一為村、蒿蹊、芦庵の関係について」『文学史研究』(大阪市立大学)19、1979年8月に拠って、蒿蹊の理論が荻生徂徠『訳文筌蹄』(初編1714-5刊)の漢和翻訳理論を経由したことにも言及する。蒿蹊が理論化を行ったのは、擬古文創作の訓練として、俗語訳を奨めるためであった。

36 「近世国学と古今集—『古今集遠鏡』における俗語訳の理論と技法」『古今和歌集研究集成』3(2004年、風間書房)。

37 注36掲出論文、252頁。

38 「和歌の現代語訳と翻訳—伊勢物語を中心に」注20掲出書、84頁。口頭発表は2003年3月。

○うひまなびなどのためには、ちうさくは、いかにくはしくときたるも、物のあぢはひを、甘しからしと、人のかたるを聞たらむやうにて、詞のいきほひ、てにをはのはたらいなど、こまかなる趣にいたりては、猶たしかにはえあらねば、其事を今おのが心に思ふがごとは、さとりがたき物なるを、さとびごとに訳したるは、たゞにみづからさ思ふにひとしくて、物の味を、みづからなめて、しれるがごとく、いにしへの雅言^{ミヤゴト}みな、おのがはらの内の物としなれゝば、一うたのこまかなる心ばへの、こよなくたしかにえらるゝことおほきぞかし³⁹、

つまり、俗語訳は自ら思考するに等しい効果を持つと言う。それはあたかも、物の味を自らの舌で知るようで、古代の雅言をそのまま消化し、血肉化することで追体験を可能にする。むろん、口語にも適不適はあり、「大かたは京わたりの詞」「うちとけたる詞」が選ばれたが、そのように選別された俗語による訳とは、「うひまなびなど」すなわち初学者を主とした対象読者にとっては、注釈よりもはるかに理解しやすい形態なのである。味を声に置き換えれば、Mostow氏の指摘のごとく、歌人の生きた声を読者の耳許へと運ぶことになる。美石が選んだのはこのような、目標テキストにおける意味理解を最優先させる同化訳であった。

それでは、この基本理念を支えるのは、どのような意識と工夫か。前述部分と、「俗語」の基準に続いて述べられるそれは、順に「各種意識の方法、助詞・助動詞等の訳出法、掛詞・枕詞の処理」の三種に大別される⁴⁰。以下に春下巻の113番歌を取り上げ、「構造」の訳出方法から、『遠鏡』の同化訳のあり方を考えたい。当該歌は、第1節でも英訳例を取り上げた小野小町「はなの色は」詠である。傍記、太傍線等は原典にも存するものである。

小野小町

花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

○エエ、花ノ色ハアレモウ ウツロウテシマウタワイナウ 一度モ見ズニサ ワシハツレソフテ居ル男ニツイテ 心苦ナ事ガアツテ 何ノトンヂヤクモナカツタアヒダニ長雨ガフツタリナドシテ ツイ花ハアノヤウニマア 世にふるとは、男女のかたらひするをいふ、男女の中らひのことを、世とも世の中ともいへる多し、此集恋の哥にも、これかれあり、いせ物語に、世ごゝろをつける、源氏物語に、まだ世をしらぬ、などあるたぐひもこれ也、

まず構成を記せば、最初に俗語訳が、片仮名漢字交じり表記で掲げられる。そして続けて第四句についての注釈が、平仮名表記によって置かれる。個別事項としては、一行目に傍記「いたづらに」がある。これは、歌中の言葉を「猶たしかにしめせる」、すなわち対応語を明らかにした箇所であり、原歌の構造に配慮した結果とも言える。そして二、三行目に傍線を付された箇所は、歌に無い言葉を「そへていへる」箇所である。注釈と傍線の形で歌意の補足があるのは、宣長が「すべて哥は、五もじ七もじ、みそひともじと、かぎりのあれば、今も昔も、思ふにはまかせず、いふべき詞の、心にのこれるものおほければ」として思いの言語化の限界を熟知し、意味の補足と伝達を重視したためであろう。

『遠鏡』の俗語訳における「構造」の位置づけについても、田中氏にすでに言及がある。同氏は、無心序（歌意とは関わらない序詞）の訳出が省略されていることと、傍線部のような、事柄を敷衍しての訳出とが補完関係にあるとし、「歌の意（趣）」の認識と伝達を第一義とする宣長の意思⁴¹を読み取る。首肯される見解

39 以下、『遠鏡』の引用は今西祐一郎『古今集遠鏡』1（2008年、平凡社）に拠る。また、鉤括弧による引用で特に言及がないものは、「はしがき」からの引用を意味する。

40 注36掲出論文、255頁。

41 注36掲出論文、265頁。

であり、本稿の関心から言い換えれば、言語上の構造よりも意味が優先され、同化が志向されたものと言える。

そしてこれは、語順のあり方にもっとも顕著に表れる。当該歌にも見えるように、宣長は基本的には原歌の語順に忠実に訳そうとする。したがって、この点は明確に異化を志向する。しかし、「もとの詞つゞき、てにをはなどを、かたくまもりては、かへりてうたの意にうとくもなれば」「其こゝろをえて、訳すべき」と述べるように、一首の意味が分かりにくくなる場合はその限りでない。構造的な異化は強いて行わないことが、「はしがき」には宣言されているのである。

訳を行う際に、意味が構造よりも優位に立つことは自然である。しかし、宣長理論に関して留意したいのは、その際に、構造を保存すべく種々の工夫が施されている点である。たとえば、当該歌のように、補足の注釈は平仮名表記で、補足の訳は傍線を付して、対応句が分明でないものは句の言葉を傍記する形で、原歌の構造が復元可能となっている。また、当該歌には見られないが、歌句の順序が改められた場合は、訳の傍らには原歌の句数が示される。無心序などの句の訳出が略された場合も、それは無と化すのではなく、枠囲いの数字や「上」「下」を以てその痕跡を留める。主たる対象読者である、初学者の学習の便を考えての工夫である。

上述のように意味を優先させ、積極的に補足を行った宣長の理論の根幹にあったのは、次のような言語理解である。このことは田中氏が「宣長の翻訳理論の要ともなる主張」と述べ⁴²、美石も『新抄』凡例の下線部③において重視していた。

○すべて人の語は、同じくいふことも、いひざまいきほひにしたがひて、深くも浅くも、をかしくもうれたくも聞ゆるわざにて、哥はことに、心のあるやうを、たゞにうち出たる趣なる物なるに、その詞の、口のいひざまいきほひはしも、たゞに耳にきゝとらでは、わきがたければ、詞のやうをよくあぢはひて、よみ人の心をおしはかりえて、そのいきほひを訳すべき也、

宣長によれば、和歌は、人間の発話の中でも特に、「いきほひ」というものを聞き取れなければ、理解しえないものだという。前掲小町歌で言えば、該歌を理解するには、初句「はなの色は」に「エエ、……アレモウ」⁴³「ツイ花ハアノヤウニマア」といった補足が必要ということになる。そして「はしがき」の後半部で個別語彙の訳出方法を論じる中に唯一、その「いきほひ」の指標になると明言されるものがある。田中氏に言う「要」の要と言えよう。「てにをは」である。

○てにをはの事、ぞもじは、訳すべき詞なし、たとへば、「花ぞ昔の香にゝほひけるのごとき、殊に力うを入れたるぞなるを、俗言には、花ガといひて、其所にちからをいれて、いきほひにて、雅語のぞの意に聞かすることなるを、しか口にいふいきほひは、物には書とるべくもあらざれば、今はサといふ辞を添へて、ぞにあてゝ、花ガサ昔ノ云々と訳す、ぞもじの例、みな然り、……

この「てにをは」とは、『新抄』において甕麻呂が着目し、『後撰集』の特色認知へと繋がった係り結びに相当する。係り結びとは、結びが句切れ位置を示す点で構造に関わるとともに、その構成要素を取り立てて疑問、反語、強調といった意を添える点で意味にも関わる重要な文法要素である。一種のモダリティー表現であり、歌学においては、早くから表現者の心の機微を示すものとして重視されていた。宣長も『てにをは紐鏡』『詞の玉緒』において係りと結びの対応関係を例証し、『遠鏡』に至って端的に、それが詠者の「其所

42 注36掲出論文、254頁。

43 ここには補足の印である傍線はないが、稿本の段階では存在したようである（注39掲出書、98頁）。宣長の補足認定の基準および「いきほひ」の訳出方法については、今後の課題としたい。

にちからをいれ」たものと解説する。『遠鏡』を範と見る美石は、甕麻呂の発言から「はしがき」の説くところを想い出し、「や—らん」が含み持つ強調の「いきおひ」に思い至り、ようやく雅正の意図を汲み得たのであろう。

解釈段階での『後撰集』期の特質の発見は、甕麻呂と美石によって血肉化された本居宣長の俗語訳理論が促したのであり、美石は重ねてその理論に従って、頭注に「花ノ主ハ。大年増デアラウ」との俗語訳を生成させたことになる。同化翻訳の有効性は、目的への合致度とともに、同時代人における受容の深さによっても測られるべきであろう。『遠鏡』の俗語訳理論は、『新抄』において「げにと心に入て。心得やすく」と評され、395番歌注においては解釈を助け、かつ生成に不可欠な存在となっている。宣長の方法は、歌意を積極的に補いながらも、傍記や傍線、平仮名による別種の表記を用いる。視覚に訴えることによって原歌の構造を伝える宣長の方法は、実際に有効に働いたと言える。

おわりに

本居宣長が『古今集遠鏡』において実践した訳は、初学者を主な対象読者とし、追体験が可能な言語として口語を用いていた。宣長の立場は、和歌には「いきほひ」すなわち語勢の把握が肝要であるとの認識から、言外に込められた意を積極的に掬いとるというものである。その際には意味の翻訳が最優先されて同化訳が行われたが、このことは構造の軽視を意味するものではなかった。訳出時には、補足部分に傍線を付す、仮名字体を変える、削除された句や語順を変えられた句を数字で示すといった、語のみに頼るのではない形で、起点テキスト構造へと立ち戻る道筋が残されていたのである。

宣長のこの理念は、ほどなく中山美石『後撰和歌集新抄』へと受け継がれ、総合的な研究が少ない状況下での『後撰集』の特質の発見へと繋がった。宣長の方法は、ただに後代の口語訳伝統の礎となっただけでなく、『後撰集』研究を推し進めた点でもその有効性を示しており、異言語間翻訳においても参照できるのではないか。

翻訳にとって、起点テキストを尊重するという意味では、たしかに異化翻訳が望ましい。しかし、日本語と英語という、語族までも異にする異言語間の翻訳においては困難も多く、場合によっては同化翻訳が有効であろう。McMillan氏や宣長のように、語彙による移し換え以外の手段を用いることで、同化を志向しながらも起点テキストの構造を尊重した訳が、可能になるのではないか。また、同化翻訳ではないが、語彙に頼らない視覚的効果を活かした訳は、Carter氏とCranston氏も用いており、翻訳におけるひとつの望ましい形と言えよう。

本稿では、西洋理論を中心に行われてきた和歌翻訳の議論に新たな視点を導入するため、前近代日本の試みとして、本居宣長の俗語訳理論とその影響下にある『新抄』の訳を紹介した。宣長理論の細部の分析や翻訳理論への応用の可能性、そして「訳」というメタテキストにおけるテキスト構造の保存手段については、今後とも追究していく。

最後に、宣長理論の翻訳への応用例として、本稿で扱った『後撰集』秋下巻の394-5番歌の翻訳を掲げる。対象読者は日本語学習者とし、宣長に倣って初学者を選んだ。『後撰集』が編まれた平安時代の習慣は現在の日本文化の礎を成すため、文化を考える切っ掛けを与えることを目的とする。また同時に、第2節で述べた『後撰集』の表現特徴が伝わりやすい訳を目指す。

隣に住み侍りける時、九月八日、伊勢が家の菊に綿を
着せに遣はしたりければ、又のあした、折りて返すとて 伊勢
かずしらず君がよはひをのぼへつつなだたるやどのつゆとならん

返し

藤原雅正

露だにも名だたるやどの菊ならば花のあるじやいくよなるらん

While married to Ise's nextdoor neighbor, on September 8¹⁾, Masatada²⁾ sent cottons to cover the top of chrysanthemum³⁾ at Ise's house, so on returning it with a picked flower the next morning, Ise⁴⁾:

Kazushirazu	Countlessly
kimi ga yowai o	extending the days
nobaetsutsu	of your life,
nadata ru yado no	I hope the dew to become
tsuyu to naranan	a member of the famous household.

reply, Fujiwara no Masatada:

Tsuyudanimo	If the ephemeral dew
nadata ru yado no	adds your famous household another name,
kiku naraba	as a house of longevity this time,
hana no aruji ya ⁵⁾	how <i>gnarled and bent double</i> must you be!
ikuyo ⁶⁾ naruran	You, the owner of the chrysanthemum flower.

1) A day before the Chrysanthemum Festival. 2) An aristocrat poet who lived around 961. 3) On September 9, the day of Chrysanthemum Festival, people try to transfer the longevity power of chrysanthemum based on the ancient belief of contagious magic. By wiping one's body with cotton soaked with chrysanthemum dew, people hoped to extend their life. Cottons were set on top of the flower the night before, to wait for dewfall. 4) One of the greatest female poets of early days. Lived around 877-938, she is one generation older than Masatada. 5) “*ya* (や)” is an important particle representing admiration. Pairing with an auxiliary verb, in this case “*ran*,” it forms a kind of modality expression. Here, the old age of Ise (*hana no aruji*) the great waka poet is cherished and emphasized teasingly. 6) “*yo* (よ)” works as a pivot word (掛詞), which generates multiple meaning based on phonetic correspondence. Often the pivot word accompanies word association (縁語) to decorate the expression. Here, it indicates 「世／節」, meaning “age” and “gnarl (of chrysanthemum)” respectively. The latter is in association with the chrysanthemum.

追記 末筆ながら、貴重な資料の閲覧、調査の許可を賜りましたカリフォルニア大学バークレー校 (UCB) 東アジア図書館、ならびに、「大学院生派遣事業」を通して調査を御支援くださりました名古屋大学グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」に厚く御礼申し上げます。